

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	依田真奈美
論文題目	Henry Caldwell Cook and Drama Education in England		
(論文内容の要旨)			
<p>20世紀初頭に、イギリス演劇教育の歴史において、演劇を国語(英語)教育の手段として初めて導入したヘンリー・コールドウェル・クック(1886~1937)は現代演劇教育のパイオニアの一人として扱われるだけで、その教育手法はこれまで十分解明されてこなかった。本学位申請論文は、クックの手法の本質を明らかにし、イギリス演劇教育の歴史の中に位置づけようとするものである。</p> <p>第1章は、演劇による言語教育の歴史を辿り、クックによる演劇を使った国語(英語)教育に至る展開を明らかにしている。意識的に演劇が教育の手段として使われるのは、16世紀のイエズス会の修道士たちによる古典語劇の上演である。エリザベス朝時代のグラマースクールでは、学校劇が古典語教育に用いられた。大学では、古典語劇や新ラテン語劇によるラテン語教育が始められた。17世紀から19世紀には、文法の論理的な分析や訳読中心の学問的言語教育が再び主流になるが、言語教育において古典語による学校劇の上演は慣習的に続けられた。20世紀初頭には、翻訳や文法知識だけに頼らず、母語習得と同様に、自然に直接的に外国語を習得すべきだという理念に基づいた言語教授法ダイレクト・メソッドが生まれた。W.H.D.ラウズはその教授法で演劇を使った古典語教育を実践した。そしてラウズの演劇を取り入れた指導法を、クックが国語(英語)教育に応用することになったのである。</p> <p>第2章は、現代演劇教育のもう一人のパイオニア、ハリエット・フィンレイ=ジョンソンの手法を吟味してクックとの方向性の違いを示し、第3章では、クックの演劇的な教育手法を分析して、その本質を解明している。1917年に<i>The Play Way</i>を出版したクックは知識中心の実利主義的教育を批判し、実際に劇を「演じるという方法」によって、文学を理解させるだけでなく、実際の上演を通して社会で生きていく力を養わせるべきことを主張した。これは、「それ自体小さな世界」としての、学校の存在価値を強調したアプローチの教育的側面と、実社会が持つ演劇性を見据えて学校を捉えた演劇的側面が融合した形であった。ジョン・デューイの影響を受けて、クックは読解中心の従来教育を否定し、生徒自身の実践と体験の重要性を強調した。これは主体的な活動から生徒の自律性の涵養を目指したもので、フィンレイ=ジョンソンにも認められる教育姿勢であり、当時の「新教育運動」が背景としてあった。全教科を教える手段として演劇的手法を用いた、フィンレイ=ジョンソンと違って、国語(英語)科目の教育に言語芸術でもある演劇を使うことだけに専念できたクックは、演劇を手段であると同時に目的としてもみなすことができた。</p> <p>第4章では、イギリスのドラマ教育を支えた二つの教育プログラム DIE (Drama-in-</p>			

Education) とTIE (Theatre-in-Education) のうち、前者の本質を探り、クックとの違いを明確にしている。1960年代に生まれた DIE は、ドラマを通して子供の人格形成を試みた。ここでいうドラマとは、演劇から観客という要素を除いたもので、DIE はそれを教育に使おうとした。そこには逆に、DIE のパイオニアたちの演劇それ自体に対する意識が伺える。それは、クックの演劇に対する意識と同質のものであった。クックとDIE のパイオニアたちとの類似性はドラマ教育の目的にも認められ、子供たちに社会で生きるための準備をさせるという共通の目的が存在する。そうした類似性にもかかわらず、DIE はやがてドラマを教育の手段として使うことに専心するあまり、演劇的な方向性を次第に失っていった。DIE と、演劇を正しく捉えながら教育の手段として使おうとしたクックとを結びつけることは、不適切であると言える。

第5章では、イギリスのドラマ教育におけるもう一つの教育プログラムである TIE を吟味し、クックを TIE と結びつけることも不適切であることを示している。TIE は19世紀後半のチルドレン・シアターを原型とし、1965年に誕生した。クックにおいては演劇そのものの枠組みが維持されたが、TIEも同様の傾向を示しているように見える。TIE は、劇団が学校と協力して、カリキュラムに沿って言語や歴史や社会問題などについて教える教育形態であるが、劇団と学校という二つのアイデンティティから、TIE は所属と財政の両面での二重性の問題を抱えることになった。この問題を未解決のまま、ドラマを正規科目から外した1988年の教育改革を境に、TIE は衰えることになった。演劇と教育の二つの軸をもちながら演劇に重心を置き続けた TIE と、演劇を正しく把握しながらも教育に重心を置いたクックとは、対極的な姿勢をもっていたと言える。

結論では、クックの演劇を使った言語教育手法の本質を再確認し、イギリス演劇教育の歴史の中に位置づけている。クックの独自性は、教育の手段として使った演劇の枠組みを維持しようとした点にある。その点で、演劇から観客という要素を除いたドラマを教育の手段として使うようになった DIE とクックは、根本的に異なっている。また、演劇と教育を共存させながらもあくまで演劇に立脚した TIE を、演劇を見据えながらも教育に重心を置き続けたクックと結びつけることも妥当とは言えないと指摘している。クックの教育手法は、演劇そのものを教育のための手段として使ったイギリスの言語教育の伝統の上であり、言語教育における演劇を使う際にはクックの示した方法論の意義を深く認識する必要がある。

(論文審査の結果の要旨)

イギリスでは20世紀初頭より、演劇を教育に使う方法論が積極的に模索されてきた。本論文の成果は、演劇を初めて母語教育の手段として使った、現在ではほとんど顧みられることのない、ヘンリー・コールドウェル・クックに注目し、その手法と実践の意義を再評価した点にある。

共時的な視点と通時的な視点の二つからクックの手法を明らかにした方法論も評価できる。例えば、第2章と第3章は前者の視点によるもので、ジョン・デューイの影響を指摘し、演劇を教育に使ったもう一人の先駆者であるハリエット・フィンレイ=ジョンソンの手法との比較も行っている。一般的に、そうした先駆者としてはフィンレイ=ジョンソンに注目が集まる傾向にあるので、この考察は意義深い。この比較によって、フィンレイ=ジョンソンにとって大切だったのはあくまでも自発的な心理表現だったこと、そしてその背後にはリアリズム演劇の影響があった可能性を本論文は鋭く指摘している。他方クックは、シェイクスピアを中心としたイギリス演劇の形式を守りながらそのまま生徒に上演させ、これによって豊かな言語表現能力や実人生への観察眼を育む教育的効果を狙った。本論文はこうした比較考察を通して、演劇教育の実践者が演劇の形式を理解することの意義を強調している。このことは今後の演劇教育を発展させていくための意義深い提言となっている。また、クックの演劇観、教育観の背後に世界劇場の概念があったことを指摘したことも評価したい。

通時的な視点においては、16、17世紀以来、言語教育に演劇的手法が頻繁に導入されていたことを確認することで、クックへと繋がる演劇教育の伝統を指摘し、さらに20世紀後半に発展してきたDIE (Drama-in-Education) やTIE (Theatre-in-Education) といった動きとクックとを比較している。つまり本論文は、イギリスの演劇教育の流れを、クックという先駆者の視点から読み直す、新鮮な試みにもなっている。この比較の結果、DIEは、演劇を教育手法に取り込み、純化した手法として定着させようとするあまり、結果的に演劇の枠組みを解体してしまったことが明確になった。これは、教育者が演劇形式を認識する重要性を強調する前半の趣旨を補強しており、論文全体の論点が力強いものになっている。

また、通時的視点の議論により、クックが早くから生徒間のグループ・ワークを授業に取り入れていたことも明らかになった。特に、20世紀後半の演劇教育者たちが生徒のグループ活動をコントロールすべき対象と捉えていたのに対し、クックは教育者の直接的な介入は最小限に留めるべきだと考えていた。現代の教育においても可能性を積極的に検討されるべきこの手法を指摘したことは意義深い。

通時的な視点を取り込むことによって教育者の羅列に終わらず、DIE、TIEといった大きな流れを選択し、クックと比較したことも適切である。通時的視点の議論に、21世紀現在の演劇教育がないのはやや残念である。近年、特にシェイクスピア演劇の教育においてはパフォーマンスを通じた教育手法が注目されている。クックをこうした動きの一世紀早い先駆けだと見なすことも可能であった。この点は今後の研究の

課題である。ただし、本論文においてクックの再評価の一步として行うべきことは、まず20世紀の流れに正しく位置づけることであったことは確かである。

本論文は結論において、クックの方法論を、日本の英語教育に応用する可能性にも触れている。クックの教育手法を明らかにするだけでなく、教育実践を踏まえた意欲的な姿勢は評価できる。しかし、母語教育の方法論を外国語教育にそのまま応用することに関しては、より慎重な姿勢が求められる。たとえば外国語教育の場合、どのようなレベルの学習者にクックの方法論が適用できるのか、その成果はどのように測定・評価できるのか、など様々な点を考慮しなければならない。

また、クックは生徒に文学の創作活動も推奨していたが、このことと演劇教育との関係についてはまだ十分には踏み込めてはいない。この関係についての考察を加えると、より充実した議論が見込まれる。

今後の研究が期待される点は見られるものの、本論文が、ヘンリー・コールドウェル・クックという、これまで焦点が当てられることのなかった教育者に注目し、その手法の特徴や、その背後にある演劇観や教育観を明らかにしたことの意義は極めて大きい。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値を持つものと判断する。また、平成25年2月4日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降